

博多とアジアの映画(95)

松浦 仁

「シネぷくおか縮刷版1975〜1984」(福岡市興行協会、葦書房発行)によると1981(昭和56)年当時の福岡市内の映画館は、この年の途中に閉館した映画館も含めて以下の39館だった。

○中洲地区(福岡松竹、福岡宝塚、福岡東映、多門日活、スカラ座、シネマ1、シネマ2、福岡東宝、ピカデリー1、ピカデリー2、大洋、ニュー大洋、大洋シネサロン、福岡グランド、東映パラス、オークラ劇場1、オークラ劇場2、中洲映劇、中洲新東宝)

○博多地区(ステーションシネマ、駅前パラス、駅前ロマン、富士映劇、サンハクト劇場)

○中央区(天神映劇、福岡天神中央劇場、センターシネマ、福岡につかつ、みなみ東映、赤坂劇場)

○西部(西新アカデミー、てあとる西新)

○南部(雑餉隈日活、筑紫映劇、筑紫東映、筑紫中央)

○東部(箱崎につかつ、箱崎東映、香椎セントラル)

このなかで1979(昭和54)年から1981(昭和56)年までの3年間にジャッキー・チェン主演の映画を上映したのは、福岡東宝、福岡東映、東映パラス、ステーションシネマ、駅前東映(後

の駅前パレス)、富士映劇、福岡天神中央劇場、筑紫東映、西新アカデミー、箱崎東映、香椎セントラルの11館だった。つまり、福岡市内の映画館の約3割がジャッキー・チェン主演の映画を上映していた。

作品ごとだと公開順に以下の映画館で上映された。

「ドラクモモンキー 酔拳」5館(東映パレス、福岡東映、駅前東映、福岡東映、筑紫東映)

「スネーキーモンキー 蛇拳」7館(福岡東映、福岡パラス、箱崎東映、香椎セントラル、富士映劇、福岡東映、筑紫東映、福岡天神中央劇場)

「拳精」2館(福岡パラス、箱崎東映)

「バトルクローク・ブロー」3館(福岡東宝、ステーションシネマ、西新アカデミー)

「少林寺大木拳」6館(福岡東映、筑紫東映、香椎セントラル、ステーションシネマ、富士映劇、福岡天神中央劇場)

「ヤングマスター師弟出馬」1館(福岡東宝)

多い順に「クレージーモンキー 笑拳」が10館、「スネーキーモンキー 蛇拳」が7館、「ドラクモモンキー 酔拳」が5館で上映された。旧作だった「少林寺大木拳」は6館で上映された。「ジャッキー・チェン大会」と銘打ってジャッキー・チェン主演作3本立て、あるいはジャッキー・チェン主演作と新作あるいは旧作の邦画やブルース・リー主演作などと併映しての特集も組まれた。とくに1981(昭和56)年は、福岡市内のどこかの映画館でジャッキー・チェンの映画が上映された。ひとりの俳優の主演作がこれほど多くの映画館で上映されたのは、福岡(日本の映画史上において初めてのことだっただろう。それもその俳優は、世界を席卷するハリウッドの名優ではなく、アジアの若い俳優だった。

ジャッキー・チェンのカンフー・アクション映画がブレイクした1981(昭和56)年、ブルース・リー人気のあがり映画ともいえる「死亡之塔」(1980、邦題は「ブルース・リー 死亡の塔」)が公開された。「ドラゴン危機一発」(1971)、「ドラゴン怒りの鉄拳」(1972)、「ドラゴンへの道」(1972)、「燃えよドラゴン」(1973)、そして「死亡遊戯」(1978)とブルース・リー主演作をヒットさせたゴールデン・ハーベストが製作し、監督は「スネ

「キーモンキー 蛇拳」(1978)、「ドラクモモンキー 酔拳」(1978)をプロデュースしてジャッキー・チェンを一躍スターに押し上げたワー・シーユエンだった。

截拳道の使い手ヒリーは、友人のチンの葬式に参列するため日本にやって来るが、葬式の最中にチンの棺を奪おうと現れた暴漢を追って殺されてしまう。悲報を知らされたヒリーの弟ボビーは、兄の仇を討つために日本へ来て、チンが死直前に行ったという「死の宮殿」に向かうと死んだはずのチンが待っていた。:(截拳道とは、ブルース・リーが開発した武術で、人間としての生き方を表す思想でもある。)

ブルース・リーは、截拳道の使い手ヒリーを演じているのだが、すでに他界しているブルース・リーが主役の新作映画には出演できない。そこで苦肉の策として「燃えよドラゴン」の未使用フィルムを一部使用して、ブルース・リー本人が3分間だけ出演し、代役で水増しした分を含めて前半30分で、主役のブルース・リーが命を落としてしまうという設定にした。以後ブルース・リーの出演場面はなく、ブルース・リー本人のアクションシーンもない。

「死亡之塔」は、香港映画界の雄ゴルドン・ハーベストの商魂の逞しき

から生まれた作品だった。そして、日本に輸入・配給した東映洋画もまた邦題にブルース・リーの名を冠し、「ブルース・リー死亡の塔」として、あたかもブルース・リーの新作映画のような売り方をしていた。なお、ほんとうの主役であるヒリーの弟ボビーを演じたのは、「死亡遊戯」でブルース・リーの代役だった韓国出身のタン・ロンだった。

「ブルース・リー死亡の塔」は、博多では1981(昭和56)年6月13日から26日までピカデリー1で「暴力教室」(1976)との2本立てで公開された。「暴力教室」は、1976年に東映が製作したアクション映画で、主演の松田優作が本格的なアクションに挑んだ、アクション俳優松田優作の原点となる映画だった。ブルース・リーのカンフー映画がヒットした同じ70年代の旧作映画を併映して、ブルース・リーvs松田優作という同時代のアクション映画を見せるという、配給した東映の意図がうかがえる。

映画館に足を運んだブルース・リー

の熱狂的なファンは、1980年に製作された「ブルース・リー死亡の塔」にも存命のリアルなブルース・リーは登場しないことは承知のうえだったことは明らかだ。それでも題名にブルース・リーが入っている新作映画を見な



いわけにはいかない、もはや死して神格化されたブルース・リーにもういちど映画館で会いたいという切実な思いがあったことだろう。

「ブルース・リー死亡の塔」は、ピカデリー1での公開と同じ6月13日か

ら福岡グランドで「暴力教室」との2本立てで公開され、ピカデリー1よりも長く7月10日まで上映された。そして、日を置かず7月11日から17日まで東映パラスで公開されているので、ほぼ1カ月のロングランで博多の東映系映画館で上映された。ブルース・リーと松田優作人気が相乗しての観客動員だったのだろう。

さらに、「ブルース・リー死亡の塔」は7月18日から8月7日まで東映パラスで「魔界転生」(1981)との2本立てで公開された。「魔界転生」は、歴史上の傑人、天草四郎、細川ガラシャ夫人、宮本武蔵らが時空間を越えて暗躍する山田風太郎の伝奇小説を原作に深作欣二監督が千葉真一、沢田研二のダブル主演で映画化したオカルト時代劇で、配給収入10億円を超えて邦画の年間興行収入14位になったヒット作だった。すでに6月に封切られて、東映パラスでの上映は再映だった。また、「ブルース・リー死亡の塔」は正月興行前の12月5日から12月18日までは福岡東映で「帰って来たドラゴン」(その後の仁義なき戦い)との3本立てで上映された。

次号に続く
Ⅱ 図版は「ブルース・リー死亡の塔」